

「父から学ぶ」

鹿児島市立坂元中学校三年

やくまる けんしん
薬丸 兼臣

「えっ、手術?!。」

僕は、父からの思わぬ言葉に驚いた。腹痛があり病院に通っていたのは知っていたが、まさか手術となるとは思わなかった。検査をしたら、腸にでき物が多数できていることが分かり、このままだと悪化する一方とのことで、手術を決めたという。比較的簡単な手術で済むといわれたが、何とも言えない不安と、家にいる家族で男が自分一人になる、母や姉、妹を支えなくてはという責任も、心に重くのしかかった。「どんな手術なの」「どれくらいの期間入院するの」など、いろいろなことが気になり、聞けば聞くほど、心配は増していった。

手術当日、僕は学校にいた。その日のことはあまり覚えていない。不安で授業も全然集中できなかった。「頼む、成功してくれ」と一日ずっと願っていた。

帰宅後、無事成功したという知らせを聞き、ホッとした気持ちでいっぱいになった。

「よかった、これで安心だ。」
でも僕はこのとき知らなかった。本当に大変なのはここからなんだということ。

手術の翌日、僕は父に会うため家族と病院へ行った。病室につくと、父とたくさんしゃべりたかったが、あまりしゃべれる状態ではなかった。点滴をしていて、とてもきつそうだった。今までの元気な父とは全く違った。

そう思っていると、父が体の異変を口にした。「足がしびれた感じがして気持ちが悪い。」

麻酔の後遺症だ。寝ていても、座っていてもどうしても足のしびれ、違和感があると苦しんでいた。それぞれ交替でさすってあげ、少し落ち着いたらかと思うと、またしびれが出ると、このくり返しだった。きつそうで、きつそうで、早く良くなつて欲しいと、みんなで父にできることを考えた。でも、面会時間は限られていて帰らなければいけない自分がくやしかった。

「本当はずっとそばにいてあげたいのに。」
それからの数日間、父がどれだけ苦しかったか、考えるだけで涙が出そうだ。乗り越えた父は本当にすごいなと思った。

容態は日に日に良くなり、7日目に点滴もとれた。会話も普通に出来るようになり、毎日これでもかというくらいに時間いっぱい話した。元気になってくれて本当に本当にうれしかった。

僕は、この父の入院を通して、改めて健康でいることの大切さを強く感じた。健康を維持する努力をしていかないといけないと思った。自分自身もしっかりとした身体を作り、家族にも健康増進のための声かけをしていこうと強く心に誓った。